カジュエロ町のサントス［V］

南十字星の下　熱砂の祈り

永井竜造

ブラジル連邦共和国バイヤ州の首都サルバドールで資源開発会議と経営会議を終えた真吾は、アジューソンの情報から、ゴヤス州カンポベルデスのエメラルド鉱山で事故死した鉱夫サントスの遺族を発見できる可能性が高まり、興奮を隠せなかった。真吾はマルシアを伴い、先にカジュエロ町に戻ったズーザを追ってサルバドールを出発。長年待ち望んでいた、サントスの遺族に償う日に思いを馳せていた。

（一）

マンゴーの街路樹が絵画のように一枚の葉さえも揺れていないのが、訝しいものに感じられた。風が凪ぎ、昼下がりの猛暑に包まれたブラジル北部の町カジュエロ。街の石畳が途切れる道路沿いの鉱山事務所に真吾がマルシアを伴って戻ったのは、二〇一〇年一月二十日だった。

鉱山事務所の近所に住む人たちは夕暮れを待っていて、道路の向かいの石畳の歩道にさまざまな形をした壊れかかった椅子を持ち出した。十数人ほどが集まって、夜風を待って世間話をするのが慣例だった。

真吾は、旅の気忙しさが過ぎた四日目、町の人々に再び仲間として受け入れてもらおうとした。地平線に陽が落ちるのを待って、皆が集う歩道の車座に歩み寄った。

ありきたりの挨拶をすると、そこに居合わせた者の中に顔見知りのドゥダがいた。でっぷりと太って頭髪を丸刈りにして、紺色のシャツと白いショーツ姿で、椅子に座ったまま左の足首を使って空いた椅子を引き寄せると、無言で

座りなと真吾に勧めてくれた。
「おい、ドゥダ、どうしたのだ。病気でもしたのか」
真吾は、ドゥダが足で椅子を引き寄せるとは非常識だと憤慨しかけたが、再会した知恵者のドゥダから侮辱を受けたとは断定できないので、見逃すことにした。
勧められた椅子に真吾が腰を下ろすと、ドゥダは、真吾を待っていたのではないかと勘ぐりたくなるほど親切な態度に変わり、尋ねもしないうちに身の上話を始めた。
「俺は真吾がいなくなってから、サンパウロ市で三年間をオフィスボーイとして働いた。そこで女房と知り合って、結婚して二人の娘が生まれた」
ドゥダの話は自慢げに始まった。
「だが、末娘が生まれた年の暮れ、俺は脳梗塞で倒れてしまったんだ」
俯くと声に勢いを失くして、しょんぼりしてしまった。
「それで、やむを得ずこのような半身不随の体で、両親の住むこの町に、幼い娘たちと帰って来たんだが、俺は三十五歳なのに、後遺症がまったく良くならないんだよ。杖を使えばなんとか歩けるが、足元も覚束なくて働くこともできない。親に食べさせてもらうばかりなんだ。……早く死にたいよ」
思い余ってか、絞り出すような擦れた声だった。
「このままでは死ぬのが親孝行なのだが……」
ドゥダは哀れな表情で涙ながらに語り続けた。
話を聞いてくれる相手をずっと待っていたのだろう。ドゥダは黒人混血で、茶褐色の顔の両目の下には、薄黒く刷毛で塗りこんだような太い幅の陰が見られた。それは、以前は健康だった彼の不運な境遇を映す苦悩の跡だった。真吾は、ドゥダが足で椅子を引き寄せて座ることを勧めてくれたのは、体の不自由な彼の誠意に違いないと確信した。
ところが、その席で事情を知らなかった真吾は、ドゥダへの配慮に欠ける質問をして彼を興奮させ激しく泣かせてしまった。後に知ったことだが、彼の前では女房の話は厳禁だったのだ。真吾はその女房の行方を尋ねてしまう失敗をした。ドゥダは途端に顔を引きつらせて、大声を上げて泣きながら、たどたどしく事情を打ち明けだした。
「俺が脳梗塞で命を落とすところを危うく助かって病院から戻ると、女房が見知らぬ男と寝ていた。嫉妬で逆上して、二人を殺そうと瞬時に思ったが体が固まって、どうしても動かないので震えていると、俺の前を女房と男が黙って家を出て行った。そのまま幼い娘たちと置き去りになった」
ドゥダの訴えるような話しぶりは、相槌と慰めの言葉を求めているのだが、真吾はあまりの出来事に怒りと哀れを

覚えて返答に行き詰まってしまった。それに、聞けば聞くほどに居たたまれなくなった。

「……」

真吾は黙していた。

ドゥダは真吾が悲痛な感情を引きずって困惑しているのを見て話題を変えた。話を途切れさせずに、その場に居合わせたセルソンの話を聞かせようとした。真吾は目の前にいる、友人だったセルソンに気を使って、二人の表情を見比べながらドゥダの話を聞いた。

「セルソンは酒が好きで、四十歳にもなるのに、理由がわからないことで急に怒りだす。それにどんな仕事を手に入れてもすぐ投げ出してしまうんだよ」

「彼の実家とも些細なことで喧嘩になって、縁まで切られてしまった」

「女房のソナリヤは働く気のない夫の代わりに他家の手伝いをしてやっと暮らしているんだが、夫婦は離婚寸前なのさ」

「それに、彼には二人の子供がいるが、姉のセリアネも弟のセイリュも足首が裏返しで生まれて、歩くことができないんだ」

ドゥダの話が途切れた。

黒人のセルソンは、汚れた灰色のランニングシャツに黒いショーツ姿で、痩せて見るからに陰気で、塞ぎ込むようにして椅子に俯き加減に座り、真面目に神妙な顔をしてドゥダの話を頷いて聞いていた。その様子は真吾には納得ができなかった。他人に聞かせる話でもないのに、抗議する様子もなく、不服そうな表情もしないのだから、どう判断しても異常にしか思えなかった。

「家族に問題を抱えて、きっと心の病になってしまったに違いない」

真吾は一瞬、そんなことも考えたが、余計なことは詮索しない方が賢明なので黙っていた。

バイヤ州のポルトガル語の話し方は早口で独特の癖があって、他の州の人々には聞き取り難いのだが、ドゥダの舌が回らない遅い話し方は、真吾にはむしろ聞き取りやすかった。それに彼の頭脳は病気の後遺症があるとは思えなかった。普通に思考することができたのだが、困ったのは、泣き出すと大声で誰かに虐められているように聞こえることだった。これには閉口した。

再び交流が始まった翌日の宵だった。隣に住むドゥダと正面の家に暮らすセルソンが、「真吾が買い取る土地は出鱈目な値段で、知らないことに付け込まれて騙されている」と親切心から教えてくれたのだが、真吾は半信半疑だった。

そしてドゥダが物知り顔で膝を乗り出すと、今度はズーザの噂話を真吾に話し始めた。
「奴はひょうきん者で八年前に再婚したんだが、働いても暮らしは苦しく、女房の連れ子で三十過ぎになる息子のゼゼは智恵遅れで、しかもアルコール中毒だよ」
「そのゼゼときたら、捨てられた物を集めては一メートルほどの高さで家らしき物を道端に作って、そこで暮らしているのだよ」
「ズーザの奴には、その先五〇メートルほどのところに小さな農場があるのに、息子のゼゼはそこにも近寄らないで、出会う人ごとに十円をせびってはピンガ（安酒）を飲んで暮らしているのさ」
「それにズーザには、もう一つの困った問題があって、絶対認められない隠し子がいるんだよ。六歳になる男の子でイゴというんだが、結婚しているのに浮気してできた子なのさ」
真吾はこの話題には触れないのが無難だという予感がしたので、用心深く相槌を打つことも避けた。
「見れば誰にも奴の子供だとわかってしまうほど父親に似ていて隠しようがないのに、ズーザは女房が怖くて認めようとしないんだ。とくに左右の目の大きさが違っているところまでが生き写しなのだよ」
「あの男には隠さなければならない隠し子だろうが、あれでは子供の身元は誰にでもわかってしまって隠し子にはならない」
ドゥダはシュシュシュと苦しそうに笑った。
そこに噂のひょうきん者の鉱山指揮者のズーザが、町の夜警から戻って来て話し出した。
「神様がこの町を見放したらしいぞ。こんなに雨が降らなければ、豆も、とうもろこしの種まきもできなくて、飢え死にするしかないな。そうなると初めに飢え死にするのは、きっとセルソンだな」
ズーザが大げさな身振りでドゥダの口調を真似て話すと、セルソンは身震いして、冗談に耐えられなくなったのか、初めて椅子から身を乗り出して、すべての歯がなくなった口をもぐもぐ動かして話し出した。
「ガソリンスタンドの前の農場では、今朝までに牛が八頭も倒れて死んでしまった。北側の農家の山羊も、ばたばた死んでいるらしい。何処の農場でも飲み水がなくて、ヒオ・イタピクル川まで一五キロも、毎日のように驢馬で水汲みに行っている始末だよ」
ここで真吾が口を挟んだ。
「水を汲んで来ても家畜は死んでしまうのか」
すると立ち止まったまま、ズーザが真吾をぎょろりと見

た。
「そんなこともわからないのか」
ズーザが鼻先で冷笑したのだった。
家畜に飲み水を与えても死ぬとは理解に苦しんだ。しかし、理由がわからなければ笑われても仕方がない。それでズーザの説明を待った。
「真吾、飲み水を用意しても、雨が降らなかったら牧草が生えないで、家畜は飢え死にするしかないんだよ。人間も同じで飲み水だけでは生きられないだろう」
肩を落としたままで、蔑むように説明したのだった。
町の人たちの風評でもズーザは真吾と同い年だったので、余計に腹立たしかった。
「俺はあんな老いぼれではない」
真吾は以前からズーザと見比べられると癪に障っていた。
「昼夜通して働いても、あのように貧しく、夢まで失くせば人間は終わりだ。カジュエロの工業用鉱山の利益が減少し続けているから、アジューソンにズーザの待遇を改善してもらおう……」
真吾が密かに考え事をしていると、またズーザが話し出した。
「それに、この町の衆は気の毒だ。年に一度の種まきで、豆も二〇センチほどにしか育たないのだからな。それに一本にわずか二、三個しか実らないとは哀れなものさ」
ズーザは他人事のような話し振りをした。
この町の者は、この地がやがて砂漠になるとは想像さえしていないのかも知れない。それに現状がどんなに過酷な環境なのかさえも、本当にはわかっていなかった。貧しいとは、他人の目からの基準による評価であって、貧しい人々には、惨めなことに、自身が貧しいという自覚がなかった。ただ苦しみながら雨を待っていた。
「なぜ、町を捨てないのか。なぜ、逃げ出さないのか」
真吾には、この地に固執して暮らす人々の真意が何処にあるのか、想像だけでは理解し難いことだった。
「皆がマックンバ（魔術）を頼って暮らすから、神様が救ってくれないのだ」
ズーザが、いつものように吐き出すように言い捨てた。
ズーザは夜空を仰ぎ見て、無数に煌く星を地平線まで目で追うと、白髪混じりの頭を両手で掻き毟り、警棒をぶらりと腰に下げて、また夜警の巡回に出て行った。何かあればピーピーと呼び子を鳴らすことになっていた。
彼が立ち去ると、真吾は、でっぷりと太った坊主頭のドゥダのことを、スピーカーのような男だと妙に感心したのだが、きっと淋しいからだろうと、むしろ哀れを強く覚えた。

しばらくすると、真吾は今頃になって、この場所がドゥダが取り仕切る噂話の発信地になっていることがわかった。真吾にとっては情報の収集先にはなったのだが、酒と祭りと恋のほかに楽しみのないこの町では、面白そうな話を皆が期待して待ち望んでいた。

体の不自由なドゥダは噂を元に話を作って皆に触れ回って歩くのが楽しみなのだと気が付いた頃には、真吾がすっかりドゥダの噂話の種にされていた。

町に広がる噂は、以前と変わらず、日本人というだけで尽きることなく作られて、皆が心待ちにして噂話を楽しんでいる様子だった。真吾が聞いても、「なるほどね」と感心するほど面白く楽しいものになっていた。

貧しい小さな町には、嫉み心がこの地のつむじ風のように渦巻いていた。

マンゴーの街路樹の下の椅子に座ると、熱いと思うほどの夜風がマンゴーの木の葉を吹き分けて通り過ぎた。小さな突風だったのだろう。

この頃の真吾はサントスの遺族捜しに夢中で、何の楽しみもないこの町に退屈しきっていた。それで刺激を求めていたのか、なぜか思い切り嘘っぽくて、それでいて本当の話に興味を示していた。それに、誰でも良いから何処かで何かが足りなくなってしまって哀しくても泣けないような人に、すべてを承知で密かに手助けをして、その哀しみを知らなかった振りをしてやりたいという怪しげな想いまで持つようになっていた。

人に話せば、普通じゃないね、と決め付けられそうな、誠に贅沢な道楽にも似た話だ。確かに常識に比較すれば異常と言うのかもしれない。

日本語を使う必要のなくなった最近の真吾は、何かを考え始めるとマルシアには知らさずに独りで話し始めるらしい。呟く程度ではない。もっと大きい声だとズーザに指摘されたことがあった。

近頃のズーザは、鉱山会社の指揮者になったのに、真吾をじっと目で追うように観察していて、いちいち口を挟むので、親切のつもりだろうが、まことに煩わしい。それに、物事には臆さないのだが、早とちりするのは困ったものだった。

真吾は、この町に暮らした最初の日本人として、その日本の心を汚すような恥ずかしい汚点は残したくなかった。

何時の日か、日本人の誰かが訪ねた時に、日本人だと喜ばれて声をかけられる。この町に暮らしたことを、貧しい人々が未練な想いで振り返ってもらえるほどの、最初の日本人になりたいと考えるようになっていた。

真吾は、手強いはずの貧しさを怖れた。そして、安全対

策強化兼広報顧問なのに、経験のある鉱脈探査に再び執念を燃やし始めた。この町の地下に資源の鉱脈さえ発見できれば、貧しい人々が幸せを摑むことができるのだ。

真吾とマルシアは、奇形児が多かったヒッタの農場にある岩場に無数の窪地があり、その穴に溜まる雨水で町の人々が洗濯をしていたのを思い出して、ガイガーカウンターで測定すると、放射線が発生していた。

真吾とマルシアには医学の知識がなかったので、放射線と奇形児の関係を証明できず、州政府へ報告書を提出することにしたのだった。

「マー、この放射線量は、放射性鉱石の鉱脈がありそうだ。新たな鉱脈が発見できたなら、カジュエロ町が一気に活性化するがねー」

真吾は、新鉱脈を発見することで、十三集落の貧しい人々と同じ人間として生きた証をこの地に残して、人々の子孫に夢を与えたいと願った。

この町に初めて来た日本人が再び戻って来たのだと言われると、多少いい加減な真吾でも日本人の代表になった気になるから不思議なものだった。町の人々も真吾の言動を観察して、あれが日本人なのかと評価するのだから、立派な人間の素振りの一つもしなければ、日本の人々に申し訳ない。

八月初めに再び電気石の鉱脈探査を始めると、いつの間にか町の噂で、真吾は日本人の大金持ちということになっていた。発信地は、どうやら今度もドゥダらしかった。この噂で連日のように物売りが殺到し出したのには困った。とくに土曜日はこの町の屋外市場「フェーラ」の開かれる日なので、あちらこちらの集落から真吾を訪ねて来て、信じられない忙しさになってしまった。

その朝の最初の客は、黒ずんだ顔に縦に彫りの深い皺がやたらに目立つ老婆だったが、きっと哀しいことが絶え間なく続いたのだろう、表情までが死んでしまったように硬く無表情だった。

「おばあさん、何の用事なの」

マルシアが優しく聞こえるように尋ねた。

「息子が肝臓を悪くして仕事もできない。それで毎日一錠ずつ薬を買っているのだが、もう十日も薬が買えないので息子を助けてくださいな……」

老婆は老いて皺だらけで指を伸ばすこともできなくなった手で、マルシアを拝んだ。涙もろい真吾の苦手な雰囲気があった。連日のように訪ねてくる人々のために薬代の準備は欠かせなかった。老婆の話を聞けば情に負けて泣き出しそうな気がしたので、これ以上の会話は避けたい。真吾はマルシアに、薬を買うように目配せした。

次はズーザの息子のゼゼだった。朝から酒やけした赤い顔をして、愛用の汚れた野球帽を横向きにかぶり、小さく見える彫りの深い童顔で、小柄な体をふらふらさせながら、右足を一歩踏み出すと一歩後ずさりして、立つ位置さえも定まらないので、妙なダンスをしているようだった。彼は左手に持ったペットボトルを、真吾の目の高さに、片手で横向きにさし出して中身を見せた。中には数匹のピヤバという小魚が入っていた。尾の近くに黒い丸印の斑点模様のある何処にでもいる魚で、観賞魚にもならない値打ちのない雑魚だった。それを百円で買ってくれと、生真面目な表情をちらりと見せた。一瞬のことだが、ゼゼは阿呆な素振りをしているが思いのままに生きているだけだという印象を受けた。

ピヤバの買い取りは即座に断った。するとゼゼは自分から次々に値下げして十円に下げた。これ以下に値下げすればピンガという酒が買えないので、ゼゼは頑張って値下げをしない。しかし、買い取っても水溜りに放流することになる厄介な代物だった。

真吾は、ゼゼは勿論のこと子供や女性たちまでが、「エイ・ミンデ・ウンヘアイス（おーい、私に五十円をください）」と口癖のようにせびりに来ても、決してただでは渡さないように心掛けていた。子供たちには挨拶を繰り返し教えた。この町の人々には生き抜く誇りと恥ずかしさを指導していた。ふと、このように出過ぎた真似をする自分が、もしかすると善人なのかも知れないと、本気で考えることがあった。

「差し上げる金はない。お金が欲しい時は、仕事を手伝ってくれたら払うよ。それとも何か売る物を自分で見つけて持ってきなさい」

真吾は繰り返し伝えていた。

ゼゼは、だから雑魚を獲ってきた。真吾は参ったなと日本語で思わず溜息をつき苦笑した。そして、彼と真面目に付き合うのが馬鹿らしくなってきた。ゼゼの値段の十円を二十円にして買い上げたのだが、毎日のように売る品を見せて、酒代をせびりに来るところを見ると、ゼゼの頭脳は知恵遅れではなく正常のように思えてならなかった。

三人目は若い逞しい男で、捕ったばかりのアルマジェロを売りに来た。このブラジルでも保護されている野生動物だ。以前にゴヤス州のサンタテレゼニアゴヤスの町で地元に暮らすフランス人の宝石商から夕食に接待されて、一度だけ、知らされずに食べてしまったことがあった。

アルマジェロの値段は、日本円に換算すると約七五〇円になる。真吾は買う意思がなかったので即座に断ったが、こんなにも逞しい男がアルマジェロを捕って暮らすしかな

いのは哀れだった。さすがに気の毒になって買おうという誘惑に堪えた。とにかく彼には早く帰って欲しいだけだった。理屈抜きだ。なぜなら彼の体臭には我慢し難いものがあった。

その宵に、真吾はマルシアを家の留守番に残して、いつものようにセルソンの家の前に行った。そこには、すでにドゥダとズーザまでが集まっていた。

そこにいた者は小話を食い入るように聞いていた。マルシアが不平そうにちょっぴりふくれた表情をして、真吾を呼び戻しに来た。

町では賄い婦のシダを「アマ」と呼んでいるらしい。真吾の情婦ということらしいのだ。これも案外、ドゥダあたりが震源地ではあるまいか。それにしても、最近マルシアが、真吾の恋人のように振舞うシダを気にしているが、身に覚えもないことで勘ぐられるのは迷惑なことだった。

ドゥダの幼い末娘が、掌の中に隠れてしまうほどの、現地でソインと呼ばれている可愛い小さな猿を見せに来た。そして歓談の中で夜が更けた。

カジュェロ町には、二カ所の噂話の発信場所があった。その一つが脳梗塞の後遺症で暇を持て余しているドゥダの家の前だった。

風評には事実も嘘もあるだろうが、いずれの場合も聞く者が面白ければ意外な勢いで広まる。真吾の噂話は次々に作られて、町の人たちを楽しませていたが、真吾がマルシアと結婚してからは、さらに面白い奇妙な風評が止まらずに、その噂の都度に怒ったり笑ったりした。

最近のドゥダは、誰の目にも頭脳が冴えていて、話す噂話が巧妙で面白くなったと頗(すこぶ)る評判が良かった。

「俺は娘たちが結婚するまでは、必ず生きてやる」

ドゥダはその場にいる者たちに、不自由な両手の拳を握りしめて、自信あり気な素振りで噂話を語るようになっていた。

「本当に秘密だがな、賄い婦のシダが真吾の愛人だという噂は本当だったよ。俺は二人が抱き合ってキスするのを見てしまったのさ」

日本人だからジャポンと呼ばれた噂話は、真吾が忍耐さえすれば、小話の好きな町の人たちを充分に楽しませることができた。

噂に始まる物語は、そのうちに噂の当事者がその場にいても、ドゥダは悪びれずに楽しそうに語るようになった。

さすがに、これには理解に苦しんだのだが、噂の当事者までがドゥダの話を楽しむ様子を見てしまってからは、なんとなく、語られる小話の面白さを想像することができるようになった。

「なるほど、噂話が繰り返して話されるうちに、皆を楽しませる小話として育まれていくのではないか」
それが事実なら、あのドゥダが当事者の目の前で、その身の上までも面白そうに話すのも理解できないことではなかった。
丸刈りの頭で小柄ながら、でっぷりとした体格、丸顔に一癖ありそうな目の配り。そんなドゥダが脳梗塞の後遺症に苦しみながらも、噂話から小話を生み出す作者として新たな生きがいを見出して、病身を乗り越えて新たな人生を切り開いて、生き抜こうとしている姿は、涙がこぼれるほど嬉しかった。
それにドゥダが病と闘う勇気は、真吾までも、生き抜く人間の尊厳に触れた気がして、胸が熱くなった。
ところが、町の人たちを最も喜ばせた噂話は、やはり主人公が真吾だった。その小話のあまりの内容に動揺して取り乱した。
「それは一九九五年だったそうだが、ジャポンが女房と恋人たちから返り討ちにあったことがある」
カジュエロ町に広まった噂に、真吾の表情は驚きで青くなり、恥ずかしさで若者のように頬を赤く染めた。何度聞いても、その都度に動揺して胸が息苦しくなった。
「日本の女房が、それぞれの国から、ジャポンの恋人二人を内密に日本に呼んだ。そして皆で示し合わせて、不意を突いて突然にジャポンの書斎に三人で揃って訪ねた」
噂話が語られると、居たたまれない気分になってくる。
「嫉妬したわけではないし、本当は誰が好きだとジャポンに詰め寄ったわけでもない」
噂話は続く。
「三人が同時に訪ねると、ジャポンがどうしたか気になるだろう」
ドゥダが話し出すと、その場の誰もが膝を乗り出して、先の展開に好奇心を示す。
「彼女たちが喧嘩したかだって?」
得意そうな表情と大げさな身振りで、聞き手を思い切り期待させて、話に釘付けにする。
「残念だが、それぞれが時の異なる旅先の恋人たちで、喧嘩など起きなかった」
見ていたように感慨深そうに話す。
「真吾の女房は、彼女たちを呼ぶ前に、恨みつらみも、その時だけは忘れるように、国際電話で通訳を使ってまで打ち合わせをして日本に呼び寄せた」
ドゥダは何度も頷いて見せた。
「真吾は勿論、最大のピンチだったはずだよ」
ドゥダは腕組みをして頸をかしげた。